

マキノ病院ニュース

第122号

— 令和4年6月1日発行 —

おかげさまで開設60周年を迎えます

事務長 前川 甚士

今回は改めまして、マキノ病院の始まりから今についてご紹介いたします。当院の前身となる診療所の開設が昭和38年、診療科目 内科・外科・放射線科を標榜し、病床数3床にてスタートし、昭和45年、26床で病院開設認可を受けました。

その旧病院を知る職員は、現在では3名となりましたが、定年退職後の職員も含め現役で活躍中です。昭和62年に新築建て替えが行われ、小児科・整形外科を新設、70床に増床となりました。私は、新病院のオプニングスタッフとして採用されましたので、旧病院のことは、患者としての思い出しかありませんが、当時、外科の先生

がよく診てくださるとの評判で、子供のころ、ケガ・病気をするとが昨日の親に連れられて来たことが昨日の親のように思い出されます。当院は、これまで地域の皆様にお支えいただき、間もなく60周年を迎えさせていただけますこと、心より感謝申し上げます。現在、病院本体は、一般病床60床（内、地域包括ケア病床24床）、医療療養型病床60床の計120床、診療科は、内科・神経内科・リウマチ科・小児科・外科・整形外科・皮膚科・肛門外科・リハビリテーション科・放射線科・泌尿器科・総合診療科の12科を標榜しております。関連サービス事業として、小規模多機能型居宅介護事業所「はび

ねすマキノ」では、通所・訪問・お泊り等の複合的なサービスをご提供させていただいております。他にも、訪問看護、通所リハビリ（高島市主導の介護予防・日常生活支援総合事業 通所型サービスCを含む）、訪問リハビリを実施いたしております。今後も、医療から介護の橋渡しを担うべく、介護・リハビリにも、より一層注力してまいります。また、法人全体の職員数は、医師20名、看護師69名、看護補助者43名、診療放射線技師2名、臨床検査技師3名、薬剤師2名、理学療法士19名、作業療法士10名、言語聴覚士2名、管理栄養士3名、社会福祉士2名、保育士2名、事務・補助職員等24名の総勢200名を数えるに至りました。これは私の入職当時の3倍近くの

数です。毎年、新卒の看護師・理学療法士・作業療法士等の入職が職場に適度な刺激をもたらすし、ベテラン職員の意欲向上にもつながり、程良い緊張感のなか、良い職場環境が維持できているものと自負しております。今後もこのマンパワーを十分に活かして、地域の皆様のお役に立てるよう努めてまいります。高島市は、県内で最も高齢化率が高く、少子化が顕著であることから、既に人口減少の局面にあり、今後も減少することが予測されます。これからの当院の歩むべき方向については、地域の皆様のご意見を拝聴しつつ、世情に敏感に、慎重に模索してまいります。今後とも変わらぬご支援のほど、よろしくお願いいたします。

診療科のご案内
内科・外科・小児科・整形外科・皮膚科・神経内科・総合診療科
肛門外科・泌尿器科・リハビリテーション科・リウマチ科・放射線科
【救急指定・労災指定】【人間ドック・各種健診】
— 診療受付時間 —
平日 8:30 ~ 12:00 16:40 ~ 19:00 土曜日 8:30 ~ 12:00
滋賀県高島市マキノ町新保 1097 TEL 0740-27-0099
ホームページ <http://www.makino-hosp.or.jp>

ドクターコーナー



認知症とは、何らかの原因で脳の神経細胞が傷つくために、記憶障害などの症状があらわれて日常生活に支障をきたす状態のことです。発症してもすぐに悪くなるわけではなく、一時的に改善するように見える時期もありますが、長期的には次第に症状は悪化していきます。薬による治療法はありますが、残

念ながら今の医療では完治させることはできません。認知症の原因となる病気は様々ですが、代表的なのが、アルツハイマー型認知症、血管性認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症の4つです。このなかでも6割以上を占めるの

年前から脳の中では病気が始まっていることがわかってきています。できた40代から発症しないように予防することが大切になってきます。残念ながら筆者も含めて読者の多くの方はもう手遅れです。でも、あきらめないでください。認知症を

認知症を予防する

「とつとり方式」をご存じですか

内科 山本 博文

がアルツハイマー型認知症で、特に80歳以上の増加が目立ちます。アルツハイマー型認知症は、症状が現れる前に「軽度認知障害」の時期があります。近年では、さらにその前に「前臨床期アルツハイマー病」の段階があり、認知症が現れる約20

発症する一歩手前の段階である「軽度認知障害」の段階であれば、適切な介入をすれば6割ぐらいの人は認知機能が正常な状態に回復することが明らかになっています。そこで今回ご紹介したいのが、「とつとり方式認知症予防プログラム」

というものです。運動・座学・知的活動を組み合わせた2時間のプログラムで認知機能や身体機能の改善を目指しています。鳥取県伯耆町で、軽度認知障害の患者さん136人を対象にこのプログラムを週1回、半年間継続したところ101人が認知機能維持もしくは向上したといった結果でした。身体機能についても、多くの人が改善していたそうです。運動のポイントには、体を動かしながら頭のトレーニングも同時に行うことです。散歩するときに歩数を数えて、決まった数になったり速歩きをする、電信柱の数を数える、花の名前を当てるなど、運動にゲーム的な要素を加えると、脳と体を同時に使うことができます。知的活動としては、塗り絵、ジグソーパズル、数独、

日記をつけるなどがお勧めです。大切なことは、本人が楽しいと思えることです。楽しく行っていること、神経細胞を増やす神経栄養因子などが活発に分泌されるため、弱っている神経細胞が活性化することが期待できます。1日の歩行時間や外出頻度が少ないほど、認知機能が低下しやすいことがわかっています。年齢を重ねても、億劫がらずに心身を活発に動かしていくことが大切ですので、「とつとり方式」を参考に今日から認知症予防に取り組んでみませんか。